
スノーマン！

酔灯 春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スノーマン！

【Nコード】

N4925BA

【作者名】

酔灯 春

【あらすじ】

雪のしんしん降る夜に、私の家の玄関を誰かが鳴らした。そこにいたのは、なんと雪だるま？しかも勇者で勇者の剣が我が家にあるって？どゆこと！？

扉を開けたそこには、一体の雪だるまが鎮座していた。

「お早う。いや今はこんにちはの方が良いか」

私は無言で扉を閉めた。

季節は真冬、ここ近年稀に見る寒さで、外はしんと雪が降り続いている。最近は天気も悪い日が続き、一週間以上晴天を見た日が来なかった。

……あれは何？ いや、見たまんま雪だるまなんだろうけど……。何かのキャンペーン？ そうかキャンペーンか。あれは着ぐるみね。私はそう結論づけると、がちりと扉をもう一度開けた。やはりそこには日本でお馴染みの二頭身雪だるまが鎮座している。滑らかな球体ボディ。太陽の光を反射してキラキラ光る白い肢体。表情の分かりづらい、木の枝と赤い木の実で作られた顔。雪だるまはどうも怒っているらしく、眉の位置にある木の枝の眉端を吊り上げていた。

「一体何だ！ 人の顔見ていきなり扉閉めるとか、どういう教育を受けているんだ！ 親の顔が見たいとか正にこの事を言うんだろうな！」

どうしよう。なんか淒く怒ってる。

「だって……だって私、雪だるまが訪ねて来た時の対応の仕方なんて知らないし……」

何だか悪いことをしたような気分になった私は、しどろもどろに言い訳する。雪だるまは目が赤い実なのに鋭い眼光で私を睨んだ。

「客が来たどんな相手でもまず要件を聞くものだろう！ いきなり扉閉めるとか、ご町内に？あの家は常に門前払いの家だ？とか噂が流れても知らんぞ！」

「え、あの……ごめんなさい。じゃ、じゃあ、何の御用ですか？」
「そうだ、それで良いんだ。俺の要件は、こっちの世界来た時にこの家に落とし物してまったようだな。その回収に来ただけだ」

雪だるまは満足げに頷くと、どこかと玄関から平和な我が家へ上がろうとした。私は慌ててその身体を押し返す。

「待つて待つて、訳が分からないよ！ それに知らない人を家に上げるのはちよつと……」

雪だるまはその言葉に、ずずいと顔を私に寄せてきた。ひい、近くで見るとちよつと怖い！

「俺はなんだ？」

「ゆ……雪だるまです」

「人って何だ？」

「ヒト科ヒト目のホモサピエンスです……」

「じゃ、俺は人間じゃないからOKだな」

雪だるまは一言言つと、やっぱり上がろうとしてきた。一瞬納得しかけた私だったが、知らない人を上げるよりも知らない雪だるまを上げる方がもっと怖いという事実が気が付き、廊下を前身する雪だるまにタックルして引き止めた。

「ちょっと待つてよ！ 知らない人外を家に上げる方が怖いよ！
全然NGだよ！」

「何、俺の事が知りたいの？ フツ、モテる男はこれだから辛いな
しょうがないな」しょうがないから教えてやろっ」

雪だるまは歩み？ というか廊下を滑るのを止めると、抱き付い
ている私の手をその木の枝の手でそつと取り、ニヒル？ に笑った。

「俺は異世界の勇者、世界“アルカディア”を救う救世主にして、
大国“オーデイン”の第一王位継承者。ライデッヒ・フォン・トゥ
エンデルク・ビスタニア・オーデイン。容姿端麗、文武両道の？ 国
内最もイケメンだと思う男ランキング？ において四年連続優勝記録
更新中の、現在異世界に逃げ込んだ魔王追跡中の平凡な男さ」

「よく分からないけど、つまるところ勇者でナルシストなんだね」
「まあね」

雪だるまは心が広がった。

「ところで、俺だけ自己紹介で個人情報開示はフェアじゃないと思
うんだが。お前も自己紹介しろ」
「え？」

いきなり自己紹介を求められてしまった。でも雪だるまの言つて
る事も最もな気がした私は、困りながらも何とか自己紹介文を捻り
だした。

「私はこの世界のごく平凡な小市民です……。地球の日本に住む、
女子高生で、学校では図書委員をしています。おかげで本に囲まれ
て幸せです。部活は美術部に入っています。先生が格好いいのでウ

ハウハです。学校の学内新聞では？意外に大物人間ランキング？四位でした。現在変な雪だるまの対応をしている、普通の女の子です」「つまるところ、ちよつと変わった普通の女子ということだな」「そういう事です」

雪だるまが事細かに話してくれたのに、私が一言だけというのはちよつと失礼だと思った。なので色々情報をプラスしてみたのである。雪だるまは、大きな体をゆさゆさと揺らして聞いていた。

「よし、お互いに自己紹介も行つたし、これで俺達は知り合い同士だ。上がっても問題はないな」

……えーと。

「まあ、そうなるね」

雪だるまに慣れ始めていた私は、その言葉に頷いた。何かおかしいような気がしないでもないけど。

雪だるま！

「それで、落とし物って何なの？」

とりあえず、応接室に通した。お茶を要求されたので、淹れたのだが、溶けたりしないだろうか。雪だるま——ライなんとは、私の不安をよそに、物凄く普通に湯呑を細すぎる木の枝の手で掴み上げると、ずずつとお茶を飲んだ。

「寒い時は、やはり熱い茶だな」

「溶けないの？　ねえ何で溶けないの？」

「俺はそこらへんの根性の無い雪だるまとは格が違う。この程度の熱湯で溶けたりなどするものか」

「自然の法則に全力で逆らってるね」

雪だるまはコトリと湯呑を置くと、重々しく語った。

「人間に不可能はないということだ」

良い事言ってる風だけど、すごく理不尽だ。

「人間じゃないよ。雪だるまだよ」

「俺に不可能はないということだ」

雪だるまは？人間？の所だけ訂正して言いなおした。

「そういうもののかなあ」

釈然としないものを感じながら、空になった湯呑にお茶を淹れなおした。

「俺が探しているのは、勇者の剣だ」

「勇者の剣」

勇者と言えばの定番の品ですな。勇者の剣という事は、やっぱり何処かに突き刺さっていたりするのだろうか。……ん？　何処かに突き刺さって？

そう言えば、数年前から、絶対に抜けないし、腐ったりもしない大根が庭に刺さってた気がする。いやしかし、あれは剣と言ってい

いのだろうか。

「ちなみに剣の形状だが、恐らく埋まっているから持ち手の部分だけ地上に出ているだろう。持ち手は純白で柄の部分に我が国の聖なる布が何枚か付いている。深くて瑞々しい緑色だ」

「……」
え？ 本当に大根じゃないよね？

「更に言うなれば、持ち手の形状が、この世界のある作物に酷似しているそうだ。そうだな……確かダイアンだかダイコーンだか言ったか……」

「……」
明らかに大根ですありがとうございました。

「ありがとうございます……」
「礼を言われるほどの事じゃない」

別にお礼を言ったわけじゃないんだけどなあ。

「その剣なら、見覚えがあるよ」
「本当か！ 案内してくれ」

雪だるまは声を弾ませた。私はよろよろと立ちあがりながら、雪だるまを先導して裏庭へと歩く。雪だるまは相変わらず床を滑りながら、足音を立てると言う器用なことをしていた。

雪だるま！

裏庭につくと、相変わらず刺さったままになっている大根があった。雪だるまは目を輝かせて、雪が降り積もった庭をぐもつぐもつと進んでいく。雪にほとんど埋まった大根を識別できるなんて、彼の目はミラクルだ。

「この剣さえあれば……」

その時だった。高速で飛来した何かが、雪だるまと剣の間に突き刺さる。

「そこまでだ」

重低音な声が響いた。雪だるまと一緒に、声がした方向を振りかえる。降りしきる雪のせいで見え辛いが、相手は黒衣を纏った何かだ。声の主は私の家の屋根の上に立っていたが、そこからひらりと飛び降りて、私たちの目の前に降り立った。

「まさか異世界まで剣を回収に向かうとな……見上げた根性だ」

舞い降りた相手の姿が、ハッキリとする。艶やかな漆黒の身体、何処かで見たとような球体フォーム。

また雪だるまだった。しかも外国式三段。

「くそつ、なんて行動が早いんだ。魔王め……！」
「……あれって魔王なんだ」

どうもあの黒い三段雪だるまは魔王らしい。黒だるまはギロリと私を横目に見ると、すぐに興味を無くして雪だるまに向き直った。

「覚悟」

一言だけで、黒だるまの姿は掻き消えた。私が驚く暇も無く、雪だるまが後方に吹っ飛ばされる。気がついた時には、雪だるまは雪に大きな痕をつけて裏庭の端に倒れ伏し、入れ替わりに私の隣には黒だるまがいた。

「ぐう……ッ」

呻き声を上げている雪だるま。球体の身体が僅かに欠けて、ぼろりと零れ落ちた。怖ッ！

黒だるまは雪だるまに起き上がる隙を見せず、追撃を開始する。グツと高さが少し低くなったかと思うと、弾きだされるかのように雪だるまに体当たりをした。

「雪が……挟れている……ッ」

黒だるまがさっきまでいた場所の雪は大きく挟れていた。恐ろしいまでの脚力だ。あれ、これ脚力か？ 足がないよね？

「いない……」

黒だるまの小さな声が聞こえた。黒だるまが突撃した場所の雪煙りが晴れる。そこには黒だるま以外おらず、雪だるまの姿は見当たらない。私も驚いて回りを見渡したが、雪だるまのテノールの声が響いた。

「こつちだ！」

屋根の上から声がしたその瞬間、散弾のように黒だるまに雪玉が降り注いだ。雪煙りにかき消されて、今度は黒だるまの姿が見えなくなる。

「うおおおおおおおおおッ！」

黒だるまの姿が見えなくなっても、雪だるまは雪玉を打ち続ける。煙が舞い、轟音がこだまし、ご近所さんが何事かと駆けつけ、私はご近所さんから身を隠そうとした。その時、雪煙りの中から黒い塊が私に向かって走った。

「きゃっ！」

黒だるまは私を木の枝で抱えると、いつかしゅるしゅると伸びた木の枝が、私の全身に巻き付いて拘束した。

伸びるの？ 君の方は枝が伸びるの！？ ねえねえ質量保存の法則って知ってる！？

黒だるまが私を抱えて跳躍する。お隣の屋根に乗って、雪だるまに言った。

「こいつの命が惜しければ、こつさ「隙ありiiiiiiiiっ！」

黒だるまが定番のセリフを吐き終わる前に、雪だるまは雪玉散弾銃をこちらに放ってきた。黒だるまはさつと私を盾に構え……っであれ、え、ウソ！

「うきゃああああああああああっ！」

目の前に雪玉が舞い散る。なんて奴だ！ 私を盾に取る方も取る方だが、一ミリの躊躇も無く雪玉を放ってくる方も方だ！ 目の前が真っ白に染まり、地肌の出ている部分に雪玉が当って地味に痛い。目をつぶって必死で耐えていると、べったりとしたものが雪玉に混じってくっついてきた。なんかべたべたするよ！

「流石は勇者と言ったところか……やはり人質は無意味だったようだな」

黒だるまはそう呟くと、ぺつと私を屋根の上から放りだした。雪とべたべたするものにくっつかれて苦しんでいる私は、前を見る事も出来ずに落ちていく。

「うわあああああああああッ！」

誰かにぶつかって、私と受け止めた誰かは雪の中に倒れた。目も開けられない状態で、わたわたしていると、雪だるまと黒だるまの会話が耳に飛び込んできた。

「ここは狭い。場所を変えるのはどうだ魔王」

「……良いだろう」

跳ねるような音と、遠ざかっていく足音。べとべとの私を抱きとめた誰かは、心配げに声を掛けてきた。

「あんた！ 大丈夫かね！」

「あ……お隣のおばさん」

抱きとめたのは、何事かと飛び出してきたお隣のおばさんだったようだ。おばさんは私を背丈は小さいけど恰幅の良い身体で私を抱

き上げると、自分の家へ連れていく。

「あんだ雪とケチャップでぐちゃぐちゃだよ。あたしの家で風呂に入ってきた」

お隣のおばさんはお母さんと仲が良い。好意に甘えて私はお風呂を借りた。スツキリとした身体で、おばさんの娘のお姉さんの服を借りて着る。

「それにしても貴女。私の寝ている間に面白い事になっていたようだね」

パジャマ姿のお姉さんが、綺麗に笑った。目の下には深い隈が刻まれている。お姉さんの部屋にお邪魔させてもらっているのだが、机の上には描きかけの原稿が置いてあった。座布団に座ったおねえさんは猫を膝に乗せ、キラキラした目でこっちを見る。私の周りではキャンキャンとチワワのハッピーちゃんが駆けまわっていて、部屋の端の水槽とゲージと檻には、それぞれミドリガメのミンク君とハムスターのレモン君とウサギのクルルちゃんが入っていて、こっちをじっと見ている。なんだか注目度が高いぞ私。

「それで？」

お姉さんはずっと身を乗り出して、私に近づいた。鼻息が荒いぞお姉さん。

「その黒だるまと雪だるま。どっちが受けでどっちが攻めだと貴女は思うよ！？」

お姉さんは今日も通常運転のようである。受けとか攻めとかは一応知識としてBL作家のお姉さんに仕込まれた。しかしどっちが受

けだの攻めだのは私には判別ができない。とりあえず、悪そうな方が攻め、という事で良いのだろうか？

「えっと……黒だるまの方じゃないかと……」

お姉さんの目がギリリと光った。拳を振り上げて、スイッチが入ったかのように熱く語り始めた。

「そうよねそうよね！ やっぱり魔王×勇者よね！ 勇者×魔王も捨てがたいけど、この場合はやっぱり魔王が攻めの方が萌えると思うのよ！ だって考えても見なさいよ！ 普通は殺せば良い話なのに、魔王はわざわざ勇者の剣を異世界に捨てると言う選択肢を選んだのよ！ これはきつと勇者の事を殺したくなかったからだと思うのよね！ あなた達が争っている時の声が聞こえてきたんだけど、良い声してるわよねえゝあの雪だるまコンビ！ あの姿はきつとこっちに来るための仮の姿よ！ 私の予測というか希望ではやっぱり定番に勇者の方が金髪碧眼のお人好しそうな青年で、正義に燃えていて、魔王の方は黒髪赤眼に切れ長の瞳で残酷冷酷非道な長身よ！ ああでもわがままそうな少年の姿でも良いわ！ 背の低い少年にやり込められる青年とかナニソレ美味しいiiiiiiiiiii！ こういう背丈が違うつてのがポイントよ！ きつと魔王は本当は勇者の事が好きなんだけど勇者はノーマルなんだわ！ 自分の国のお姫様の事が好きなのね！ それで魔王が自分の事を好きだなんて事実気がついていないから、「お前を倒して、俺は姫を守る！」とかいつちやって、魔王が心を痛めながら、剣を交えつつ泣きそうな顔になって「黙れ……黙れよ。黙れえええええッ！」とか言うのね！ きゃあああああああああアイ！ 実にイイ関係だわ！ 争わざるを得ない立場だから、想いを伝える事はないけれど、それでも我慢ができなくなっちゃって、いつその事って感じて勇者を監禁するの！ 監禁してても手は出さないわ！ 毎日話しに来るだけで、

でもある日手を出しちゃって、魔王は夜は。。。で××な事を
ついでに勇者に強要してハッスルしちゃって、×××なんてものまで用意
しちゃうのよ！あ、ちなみに×××は。。。を。。。な事にするた
めの道具でこれがもうすぐくてね！もちろん道具に頼らないプレ
イとして××××な感じに縛って。。。を××してやると。。。しち
やうからそれで×××なんて此処でしちやえは勇者は思わず。。。しち
やうわよね！そのせいで顔を羞恥と怒りに真っ赤に染めて魔王が
そこで×××とかいっちゃって最終的に……」

ヤバい、お姉さん完全にスイッチが入っている。こうなったら数
時間はノンストップで止まらないよ。放送禁止用語が雪崩のように
押し寄せてきているよ！

それにしても、チラ見しただけの相手からこれだけの妄想がで
きるお姉さんのパワーすごい。これが腐女子というものか。それとも
お姉さんは有名BL作家だから、人一倍妄想パワーがあるだけなの
だろうか。

「あ、そういえば……」

お姉さんの物凄いトークを流し聞きしていた時に、ふと思い出し
た事があった。勇者の剣はどうなっただろう。うちの庭に刺さっ
たままで彼等は移動していつてしまった気がするのだが。

しかし、どうやって此処を脱出しようか。お姉さんを止めるなん
て恐ろしい事、私には出来そうもない。困っていると、お姉さんの
膝に座る猫、お姉さんがぬこ様と呼んでいる彼と目が合った。彼は
私のアイコンタクトに反応して、しゃきーんと鋭い爪を取りだし
て見せる。

「にゃ」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

お姉さんの手をがりつとぬこ様が引つ搔いた。お姉さんは何処かの悪役のような断末魔を上げて転げ回る。ナイスぬこ様。

「お姉さん、私ちよつと気になることがあるのでそろそろお暇しますね！ さようなら！」

「あ、ちよ、ま……」

「これに」

「GUAAAAAAAAAAAAA!」

私を引きとめようとしたお姉さんの背中になぐさの爪が襲いかかる。お姉さんは再びのたうち回った。

「うう……背中を搔いてくれたんだよね……ありがとうめこ様♪
でも愛が痛い……」

最後に聞こえたお姉さんの声。あれをやられて怒らないとはお姉さんの凄すぎるよ！ 耐久力高いな！

雪だるま！

雪だるまと黒だるまは、戦っていた。拳が、枝が、ぶつかり合つて、そのたびに吹っ飛ぶのは雪だるまの方。身体は所々が欠け始めており、黒だるまはどこも欠けることなく悠々としている。

「ひゅーっ！　ブラックの奴かけええええええつ！」

「さっすがブラックだな！」

「何してんだよホワイト！ お前の力はその程度じゃないだろ！」

公園に場所を移動した彼らだったが、野次馬は集まる一方である。元々いた子供たちが携帯を駆使して情報を伝え、どんどん広まっていったのだ。

しかし二人はその野次馬を気にもとめていない。雪だるまが黒だるまに体当たりをしようとして、それを迎え撃つ黒だるま。吹っ飛んでいったのは雪だるまの方だ。ズサササササッとその身体を茶色く染めて、滑り台にぶつかって止まった。雪だるまは立とうとして、体勢を崩した。立つことは出来なかった。

今の衝撃は当り所が悪かった。滑り台の尖った部分に身体が当たてしまい、下の雪玉の半分以上を削られてしまっていたのだ。身体が雪で出来ているが故に、痛みなど感じる事はなかったが、精神的に追い詰められて雪だるまは苦鳴を漏らした。

「……ッ！」

黒だるまは雪だるまが動けなくなったと見てとるや、攻撃の手を止めてわざとゆっくりと近寄っていく。動けない雪だるまを見下ろす黒だるまの姿に、野次馬は無意識に息を張り詰めた。

「哀れなものだな。勇者」

淡々と、抑揚のない声で黒だるまは語る。

「国を、世界を守ったお前を待っていたのは、化物との悲鳴。人々に罵倒され、怯えられ、殺人鬼と呼ばれたお前は、何故今なお守ろうとするのだ？」

黒だるまの表情？ は変化しない。しかしその声には僅かな困惑と、憐れみが籠っていた。

「先代魔王の呪いにより、お前はその姿となった。その呪いはお前のバックにいる神により、俺にも伝染したが……。魔界ではこの程度、普通の姿だ」

雪だるまは、顔を伏せた。こちら表情の非常に読みにくい顔ではあったが、何処か悲しんでいるような雰囲気はあった。

「俺の仲間になれ、勇者。いや、ライドッヒ・フォン・トゥエンデルク・ビスタニア・オーデイン」

雪だるまは顔を上げた。すっと木の枝でできた手を差し出す黒だるまの顔をじつと見る。そして、少しの間をおいてその手を払いのけた。

「断る」

その目は、赤い木の実で出来ているにも関わらず、強い闘志を感じさせた。

「そうか……ならば」

黒だるまが、手を自らの身体に突っ込んだ。驚く野次馬を放置し、その身体の中からズルズルと何かを取りだす。

「それは……」

流石の雪だるまも呆然として、取りだされたそれを見詰める。細い手に取られたそれは、漆黒の剣。

「俺専用に打ち直された魔剣だ。その効果は」

風を切る音がした。同時に、響き渡る雪だるまの悲鳴。

「斬った相手の身体を喰らうというものだ」

木の枝を食いちぎり、剣の腹に現れた口はくっちゃくつちやと枝を咀嚼していた。黒だるまは雰囲気満足げに雪だるまに言った。

「お前の身体をどこまで食えば、意識は消えて死ぬんだろうな？」

雪だるま！

家に戻ると、荒れた裏庭があった。地面が凄く抉れてます……あの雪玉を受けて良く生きてたなあ私。

「……あれ？」

良く生きてたなあじゃなくて、何で生きてるの私？ 地面が抉れる程の雪玉の盾にされたのなら、死んでるのが普通じゃない？

ざくざくと、雪だるまが黒だるま単体に攻撃した時の場所に足を運ぶ。抉れた地面と、潰れた雪玉。手をその雪玉の中に突っ込んでみると、中から出てくる出てくる拳大の石達。

「雪玉に石を仕込んでいたのか……」

でも、私に投げた時は、石が入っておらず、代わりに入っていたのはケチャップだった。真っ赤に染まった身体のケチャップが中々

落ちなかったから、お風呂ではだいぶ苦労した。
あの時。

『こいつの命が惜しければ、こうさ』隙ありiiiiiiiiっ！』

傍目には、雪だるまは私の事をどうでもいいと思って、攻撃したように見える。けど、あそこで引いていたとしたら、果たして私は今此処で無事でいられただろうか。

『流石は勇者と言ったところか……やはり人質は無意味だったようだな』

黒だるまはそう言って、私を人質として無価値だと判断し、捨てた。つまり私は、雪だるまが私を容赦なく攻撃する事によって、解放された。

『ここは狭い。場所を変えるのはどうだ魔王』

最後にそう言って、この場を離れていった。それは何のため？
石ではなく、ケチャップを雪玉に仕込んだのは、何のため？

「……………行かなきゃ」

雪だるまに私は助けられた。だから、今度は私が彼を助けるのだ。私はぐっと大根にしか見えない勇者の剣の柄を握った。

「う……つく！　くう……ッ！」

勇者の剣はなかなか抜けない。早く届けて上げないと、きっと困っている。手がかじかんでなかなか抜けない。やはり勇者ではないと駄目なのか。

「あんたあつ！　もつと腰入れんといかんやろがアツ！」

「んきやつ！？」

いきなりお尻をひつ叩かれて、私は驚いた。振り返ると、そこにはお隣のおばさんが立っていた。

「ホラ、貸してみ。おばさんが抜いたるから」

「あ、はい」

おばさんは腰を落として、大根の葉っぱと白い身体の間にところをしっかりと握った。そして、深く息を吐いたかと思うと、カツと目を開いて叫んだ。

「どりゃあああああああああああああああつー！」

勇者の剣が……抜けた。おばさんはエプロン姿のままで、カーデイガンの袖を捲り、さんざんと輝く勇者の剣を……っというかもろ大根を握って、引き抜いたままのポーズで立っている。その姿は、私には何よりも輝いて見えた。

「ほら、持っておいき」

そつと私に大根を握らせるおばさんに胸が詰まって、私は何も言えずに頭を下げて走り出した。

戻ったその時は、必ずおばさんに「ありがとう」って伝えよう。

雪だるま！

私が走っていると、やたらと人々が走っているのが見えた。人々は口々に興奮した口調で、黙っていても色々な声が聞こえてきた。

「おい！ 雪だるまが戦ってるって本当かよ！」

「間違いないぜ！ 早くいかないと！」

間違いない。あの二人の事だ。人の流れに身を任せれば、あの二人の戦っている場所に辿りつけるだろう。しかし、あの場を去ってから大分時間が経っているし、この分だと物凄い人だからができていそうだ。私は服のフードをきつちりと被って顔を出来るだけ隠してから、更に足を速める。

「は……っは……ッはッ」

間に合うだろうか。間に合わなくても、間にあわせなくてはいけない。

心配だ。心配だ。彼の事が心配だ。足が重い。もっと速く、お願いだからもっと速く動いて。手に持った大根が輝いた。

「うっ、わっ！？」

純白に光る大根が、どんどん形状を変えていく。葉っぱの部分が白く染まり、白い部分が二つに裂ける。白く染まった葉っぱは私の身体に巻き付いていき、白い部分はどんどんトランスフォームしていつて翼へと変わった。

「わああああああああっ!？」

翼になった大根が、私を空中へと連れていく。足が地面から離れ、不安定な空中にいるために落ちつかない。しかし、翼は私が落ち着いていようとまいと、真っ直ぐに何処かへ向かって飛んでいく。

「あああああああああああああ………」

傍で走っていた人々は、呆然と私を見送っていた。

雪だるま!

翼に強制的に連れて行かれたのは、大きな人だかりができている公園だった。公園の滑り台の所には、黒だるまと雪だるまの姿がある。野次馬の人々が、空を飛んでいる私を指さして、口々に何事かを叫んでいた。

翼は私を地面に下ろすと、ゆっくりと収束していく。光の粒子は大根の形へと変わった。

「それは……抜いたんだな。勇者の剣を」

黒だるまが振り返り、その向こうにいる雪だるまを見て、私は小さく悲鳴を上げた。

「なんて事を……」

雪だるまは、もう身体の三分の二以上がなくなっていた。てゆうか顔だけだ。身体が失われ、言うなれば生首のような状態で転がっていた。

「だが、この状態ではもう剣を振る事は出来まい。わざわざ勇者の剣を届けてくれて、ご苦労だったな」

「……ない」

「……？ 今、なんと言った」

黒だるまが、不愉快そうに訊き直した。

「許さないって、言ったのよ!!」

黒だるまに向かって、大根を大きく振りかぶる。どう見ても大根にしか見えない勇者の剣を振るう私を、黒だるまはせせら笑った。

「はははははははは！ それで、俺に立ち向かうと言っのか？ 片腹痛いわッ！」

「やあああああああッ」

嗤う黒だるまは、避けるそぶりすら見せない。私はそのまま突っ込んで――

「何ッ!？」

――現れた銀色の刃が、黒だるまを真つ二つに切り裂いた。

野次馬が歓声を上げる。振った私自信驚いて、振り返って黒だるまを見た。身体を斜めに切り飛ばされた黒だるまも、ゆらりとこちらを向いた。真顔のまま、姿を消した。

「ッかは！」

気がつけば、私は黒だるまに吹っ飛ばされて、ブランコの棒にぶつかっていた。黒だるまは酷く不機嫌な声音で、私を罵る。

「勇者でもない癖に……お前程度の人間が、俺に傷をつけたのか……！」

背筋を走り抜けた悪寒。脳内では全力で警報が鳴る。黒だるまは雪だるまにやったように、ぐっと身体を少しだけ縮めて発射の体勢を取った。

「痛……ッ」

私は痛みで動けない。迫る黒の巨体。此処までかと目をつぶろうとした時、真横から白い物体が黒だるまをふっ飛ばした。

「え？」

「馬鹿！ 何で来た！」

身体を壊されたはずの雪だるまがいた。私は困惑しながらも、勇者の剣を雪だるまに手渡した。雪だるまは無言で受け取ると、黒だる

まに向かっていく。

「生きてるか譲ちゃん！」

「しっかりしろ！」

野次馬の人々が、わらわらと集まって私を戦闘から引き離していく。訳が分からない、と言った顔の私に、子どもたちが得意げに語った。

「お姉ちゃんがブラックと戦っている間に、俺達でホワイトの身体を直してやったんだぜ！」

そう言えば、雪だるまだってことすっかり忘れていた。体の原材料雪じゃん！

「ぐあああああああああああああああああ！」

黒だるまの悲鳴が聞こえてきて、私は戦いの場を振りかえった。今正に、雪だるまによって止めを刺された所だった。

「勇者の剣強ッ！」

私の小さなツツコミはさておき、黒だるまの身体がだんだん溶けていこうとしていた。溶けかけの黒だるまは、擦れた声で雪だるまに問いかける。

「何故……何故見返りも無く、お前は世界を守ろうとする。お前がここで俺を倒して帰還したとしても、お前の居場所などどこにもないだろうッ！」

雪だるまは、三分の一が欠けたままの頭を横に振った。

「……そういう問題じゃない。守りたいから、守るんだ。馬鹿にされても、蔑まれても、俺はアルカディアが大好きなんだよ！」

黒だるまは、それ以上何も言わなくなった。どんどん身体が溶けていき、最後に液体だけになって地面に吸い込まれていく。静まり返った野次馬の誰かが、ぽつりと呟いた。

「勝ったんだ……」

それを皮切りに、どんどん言葉が増えていく。そしてついには、雪だるまに向かつて多くの人々が歓声を上げながら駆け出し、飛びついていった。

——歓声は夜まで、消えることはなかった。

雪だるま！

雪の降り続く夜だった。

先日のダブル雪だるま騒動を思い出し、私は少しだけ笑う。あの後、テレビ局が来たり、ネットに画像が流出したり、私がネットでお尋ね物になったりと大変だったが、それも一応ひと段落はついた。そして、雪だるまはというと、元の世界に帰って言ってしまった。当然といえば当然なんだけど、黒だるまのあの言葉を聞いた以上、とても心配だ。彼は大丈夫なのだろうか。

ピンポン

「はいはい」

玄関の呼び鈴が鳴って、ガチャリと扉を開ける。そこにいた物体に、私は硬直した。

「ライデッヒ・フォン・トゥエンデルク・ビスタニア・オーディン改め、ただのライデイツヒだ。ここに居候させてもらう事にした。これは決定事項だからよろしく頼む」

見覚えのある、白い球体。つまり雪だるま。私は困ったように笑って出向けた。

「ようこそ、我が家へ」

雪降る晩に、あなたの家にも雪だるま。

（後書き）

冬ですし、冬っぽいものが書きたいなー、と思って書きました。馬鹿展開ですが、これでも制作にほぼ一日かかったんだぜえ……。途中からは作者にも予測外の方方向に走り出す……。疲れましたが楽しかったです！

——ピンポーン

……おや？ 誰か来たようだ。ちょっと出てきます。ではでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4925ba/>

スノーマン！

2012年1月13日18時58分発行